

9:00~10:30

シンポジウム1：リウマチ手外科の原点と挑戦

座長：石川 肇（新潟県立リウマチセンター リウマチ科）
岩本 卓士（慶應義塾大学 整形外科）

SY1-1 手関節に対する関節温存手術の適応と課題

Joint preserving surgeries for the rheumatic wrist

那須 義久¹, 西田 圭一郎²

¹岡山大学病院整形外科, ²岡山大学学術研究院医歯薬学域 整形外科

当科における2004~2021年のリウマチ手関節手術143例の背景を調査すると、最近の症例の方が生物学的製剤使用率が高く、術前CRP値が低値で、高度の関節破壊を有する例は減少していた。また手術時の罹病期間・年齢は長期・高齢となっていたが、腱断裂を有する例の割合は変わらなかった。全固定が必要になる前、腱断裂が進行する前に、部分固定術を含む関節形成術を行えるようにリウマチ内科医との密な連携も重要である。

SY1-2 RA手関節における手関節全固定術の適応と課題~Wrist Fusion Rod (WFR[®])の有用性~

Wrist Fusion Rod (WFR[®]) for the total wrist arthrodesis of the rheumatoid wrist.

大倉 千幸^{1,2}, 高須 勇太^{2,3}, 石川 肇², 阿部 麻美², 大谷 博², 中園 清², 村澤 章²

¹群馬県済生会前橋病院 整形外科, ²新潟県立リウマチセンター リウマチ科,

³鳥取大学医学部附属病院 整形外科

高度なRA手関節に対して人工手関節置換術や手関節全固定術が行われる。我々はWrist Fusion Rod (WFR[®])を用いた手関節全固定術の術後長期成績や合併症、アンケート調査から手関節全固定術の適応と課題について検討した。術後無痛の安定した手関節が獲得され、握力は増加していた。術後合併症が少なく、年齢を問わず患者満足度は高かった。一方で掌背屈の可動性は失われるため隣接関節の機能を評価した上で適応を決めるべきである。

SY1-3 人工手関節置換術の適応と課題

Criteria for and Problems with Total Wrist Arthroplasty

松井 雄一郎^{1,2}, 河村 太介¹, 遠藤 健¹, 門間 太輔³, 本宮 真⁴, 三浪 明男⁵, 岩崎 倫政¹

¹北海道大学大学院医学研究院 整形外科学教室, ²北海道大学大学院歯学研究院 臨床教育部,

³北海道大学病院 スポーツ医学診療センター, ⁴JA北海道厚生連 帯広厚生病院 整形外科 手外科センター,

⁵独立行政法人労働者健康安全機構 北海道せき損センター 整形外科

我々が開発し、近年国内での臨床使用が可能となったDARTS人工手関節置換術後に生じるlooseningの有無を、当院の症例を対象にX線学的に検討した。術前にCM関節や手根骨が強直している症例では、術後のX線学的成績は極めて良好であり、looseningや手根骨スクリューの折損は認めなかった。本発表では、人工手関節置換術の適応と課題を中心に考察する。

SY1-4 MP関節に対するシリコン形成術の適応と課題

Indication and problem of silicone metacarpophalangeal joint arthroplasty

石井 和典^{1,2}, 岩本 卓士¹, 木村 洋朗¹, 鈴木 拓¹, 松村 昇¹, 佐藤 和毅³

¹慶應義塾大学 整形外科, ²埼玉メディカルセンター 整形外科, ³慶應義塾大学医学部 スポーツ医学総合センター

関節リウマチ患者の手指MP関節に対する関節置換術において、シリコンインプラントは最も頻用されているインプラントである。一方でシリコンインプラントは高率に折損することが代表的な合併症であり現状でも課題となっている。当科では術後患者の臨床成績およびCTによるバイオメカニクス研究の両面から折損のメカニズムを推定し、早期折損予防ため術後に過度のMP関節屈曲を制限することが必要と考えている。

SY1-5 MP関節に対する関節温存手術の適応と課題

Challenges in MP joint preserving surgery for rheumatoid hand

小田 良, 大久保 直輝, 遠山 将吾, 土田 真嗣, 徳永 大作, 高橋 謙治

京都府立医科大学 整形外科

われわれはリウマチ手の関節温存手術に積極的に取り組んでおり、母指変形と尺側偏位に対して独自の術式で良好な成績を挙げている。関節温存手術では適応、つまり手術のタイミングと病態を考慮した機能的再建を行うことが重要である。課題は長期成績である。長期に渡ってIADLを維持するためには変形の評価から現状と予後を正確に判定し、一貫して治療するtotal managementを構築する必要がある。

SY1-6 ボタン穴変形、スワンネック変形に対する外科治療

Surgical treatment of boutonniere and swan-neck deformities in the rheumatoid hand

秋田 鐘弼, 池田 将吾

大阪南医療センター 整形外科

関節リウマチ (RA) 手指変形のボタン穴変形、スワンネック変形の治療には、その機序と病態の理解が重要であり、それぞれの変形には主因となる病態がある。その主因を矯正することが、RA手指変形の治療原則である。そして、RAの疾患活動性のコントロールが良ければRA手指変形の外科療法の好成績が期待できる。今後、薬物療法の進歩がRA外科治療にも好影響を及ぼすと考えられる。